

『狭衣物語』 飛鳥井と一品の宮母子の物語

——『源氏物語』引用を基点に——

野村 倫子

はじめに

『狭衣物語』には二人の一品の宮が登場する。一人は一条院の姫宮で狭衣北の方、もう一人は狭衣の実娘で、平中納言の女である飛鳥井を母とする。この姫君は一条院の一品の宮（以下「一品の宮（Ⅰ）」とする）に引き取られ、狭衣即位の後に一品の宮に叙される（以下「一品の宮（Ⅱ）」とする）。

母飛鳥井の『源氏物語』引用の研究が深化しているのに対して、娘の一品の宮（Ⅱ）の引用研究は意外となされていない。本稿では、飛鳥井と一品の宮（Ⅱ）に関わる『源氏物語』引用を捉え返しながら、『狭衣物語』の目指したものの一端を明らかにしていく。

一、飛鳥井の「夕顔」取り・「玉鬘」取り

『物語二百番歌合』において、飛鳥井は出会いに於いて夕顔（十一番・十二番）と、入水とその後生き延びての想いに関わっては浮舟（三十四番・五十九番・六十八番・七十七番・九十番・九十一番・九十二番）と集中して番わされ、引用に拠る類似性は顕著である。「夕顔」巻との関係は「典拠」の視点から土岐武治氏が、系図・哀傷歌の表現・四十九日の供養・遺児に対する光源氏と狭衣の世話のありさまなど四項目の共通点を示した^①。

さらに、星山健氏は『狭衣物語』の巻一・巻三の飛鳥井物語に関わる箇所、つまり、飛鳥井が仁和寺に行き見初められた威儀師に盗まれてから、失踪し女子を出産するまでの時間の流れを、「帚木」「夕顔」の時間の流れの反転であるとし、単なる詞章レベルの引用に留まらず、構成そのものに大きく関わるとする^②。

上京するまでの玉鬘には和歌の作詠がないために『物語二百番歌合』の対象とはならなかったが、土岐武治氏は、肥後での玉鬘への求婚譚と式部大夫道成に飛鳥井が盗み出されるくだりや、長谷寺の本尊十一面観世音の御利益によって玉鬘が母夕顔に仕えた右近に邂逅したことと飛鳥井が虫明の千手観音によって救われるくだりに典拠関係を認める^③。

詞章の比較に留まらず類似の場面設定まで拡大すると、飛鳥井と夕顔の遺児玉鬘の共通点も見いだせる。

まず一つめが、飛鳥井入水のキーワードとなる「唐伯」という地名である。道成に同道された飛鳥井は舟中「ひき被きて臥し」（巻一①二三五）で過ごし、実景の描写は一切ないまま入水するまでの旅が描かれる。舟に乗せられて以来、人々の会話に摂津の「鳥飼」・「江口」（同二三四）の名を聞き、「海」に入ることのみを考え続けて（同四三・四九）、「虫明の瀬戸へ来よ」（巻一①一五一）の舟歌から都を遠く離れて備前まで来たと知る。道成が我が主人と誇示した狭衣が自分の通い人だと知った飛鳥井は、実はまだ唐泊であるとも知らず入水を図る。「虫明の瀬戸」と言い

ながら「唐伯」で入水したことは、道成の報告（巻二①二五〇）からも間違いない。

「虫明の瀬戸」と「唐泊」の齟齬について、小町谷照彦氏は「虫明の瀬戸」は「むさけのせと」の形で、和歌に詠まれ、都人にとって既知の地名とされる。^④高野瀬恵子氏は、「虫明の瀬戸」と聞いて入水したが、当時の貴族にとってリアリティがあつて新鮮味のある「虫明の瀬戸」での入水という設定が、『源氏物語』にない新鮮さと「水底に沈む女」の伝統的なパターンを融合させて「飛鳥井物語」を成功させたとされる。^⑤また、桜井宏徳氏は、「虫明の瀬戸」は「逢瀬」を連想させる「瀬」を含むことに意味があり、「唐泊」は「唐」あるいは「韓」が日本との距離感を喚起し、狭衣と引き裂かれた絶望的な心理的距離を象徴するという。^⑥

「虫明の瀬戸」と「唐泊」の二つの地名が錯綜するため見えにくくなっているが、「唐泊」であることは「玉鬘」引用であることにほかならない。

玉鬘は都で生まれ、母夕顔の行方不明後乳母一家に擁護されて九州に下向、成人の後肥後の大夫督の求婚を回避して上京するが、旅の記録は「松浦の宮」（玉鬘③一〇〇）、「浮鳥」（同）、「ひびきの灘」（同）、「川尻」（同③一〇一）と、乳母一家による和歌作詠も重ねて描かれる。瀬戸内海の旅に不安があつたが、「唐泊」には都近くに辿り着いた感慨が込められる。

「川尻といふ所近づきぬ」と言ふにぞ、すこし生き出づる心地する。
例の、舟子ども、「唐泊より川尻おすほどは」とうたふ声の情なきも
あはれに聞こゆ。（同）

唐伯よりも都に近いにも関わらず、光源氏が過ごした明石や須磨の名が見えないまま、突如京の「九条」（同③一〇二）に地名は飛ぶ。

一方、唐泊までの飛鳥井の意識にも「須磨」「明石」の名はない、突然耳に入った「虫明の瀬戸」は（播磨の唐泊より遠く）摂津を西に越え、

畿外の地であり、狭衣のいる都からの距離を感じさせる。一方、西から都を目指して東上する玉鬘一行にとって、ここ唐伯は畿内は間もなくという安堵に胸撫で下ろす地であつた。都と九州の間にあつて、都との心的距離を確認する地であつたとの意味づけは、やはり「玉鬘」引用あつてのものである。

一方、「須磨」の地は「光源氏」の名とともに、後に狭衣が飛鳥井の遺詠を記した扇を見た場面で明示される。

唐泊底の藻屑も流れしを瀬々の岩間もたづねてしがな

かひなくとも、なほかの跡の白波を見るわざもがなと思せども、心にまかせぬありさまなれば、いかがは。光源氏の須磨の浦にしほたれわびたまひけんさへぞ、うらやましく思されける。（巻二①二五四）
飛鳥井入水の現地である唐泊に赴きたくとも都の日常に束縛されて叶うことはない我が身に比して、たとえ流滴であつても「須磨」に赴くことのできた光源氏が羨望する狭衣の思いが凝縮される。^⑦（光源氏が自発的に赴いた「須磨」のみが明記され「明石」の名を出さないところに、後半部で明石の母子引用を全面にせり出す効果を待っていたというのは穿ちすぎか。）
のちに一品の宮（Ⅱ）の存在が世に知られ、飛鳥井の素性を知つた道成が大宰の大式となつて下向する途に「言忌」も憚らず作詠した地が「唐泊」である。

帰りこしかひこそなけれ唐泊いづらながれし人の行方は

（巻四②三九三）

異文を含めた本文の微妙な対応関係も認めつつ、小町谷照彦氏は、『狭衣物語』の特徴といえる「射程の長い語の連関という方法」が、認められ、道成は巻二の狭衣の歌に追和する形で飛鳥井を失つた嘆きを詠んだとされる。^⑧

類似点の二つめは、都から隔たった寺院での情報伝達の場面で、紀伊

粉河寺で狭衣が飛鳥井の存命を知る過程と、大和長谷寺で夕顔に仕えた右近が遺児の玉鬘に邂逅するくだりである。

『源氏物語』「玉鬘」は、亡き夕顔が存命ならばと光源氏が追憶するところから始動する。かつて夕顔に仕えた右近は、「はしたなきまじらひのつきなくなりゆく身を思ひ悩みて」（玉鬘③一〇六）と自身の身の処し方に悩んで長谷寺に参詣するが、夕顔への追慕の念も保ち続けていた。その玉鬘は上京したものの実父内大臣（もとの頭中将）に接近する手立てもなく初瀬に詣で、たまたま同宿した右近の「記憶」を呼びさます。

…この男の顔見し心地す。…と、呼び寄する女を見れば、また見し人なり。…「なほさしのぞけ。我をば見知りたりや」とて、顔をさし出でたり。
（玉鬘③一〇六―一〇八）

「視覚」によって喚起された「記憶」が、遺児玉鬘との再会を果たす。しかし、光源氏への連絡は時を置き、実父内大臣との再会にはさらに時間を要す。そして、その間に玉鬘は光源氏の養女として世間に披露される。

一方、飛鳥井の方は、唐泊で投身したところを兄の山伏に救われて京に戻るが、その情報は狭衣には届かなかった。

その狭衣は、源氏の宮への叶わぬ想いから出家を志して粉河寺に向かう途中、吉野川を舟で移動する際に「かの底の水屑」（巻二①二九七）を思い出し、そこから飛鳥井の縁に引かれ始める。粉河寺での狭衣と山伏との邂逅は「聴覚」に拠る。

三昧堂の方に、いみじう功入りたる声の少し唖れたるして、千手経をぞ読むなる。「菩提の因とならん」といふところの、中に耳とまりたまふに…
（巻二①三〇〇）

この場面の直前、「聞く人みなしみ入りて悲しくいみじきに、さばかりのあらあらしき修行者どもも涙を流したり」（同二九八―二九九）と狭衣の読

経の声のすばらしさがいわれ、普賢菩薩の示現さえ得ていた。その狭衣の心を惹いた声の主が、飛鳥井の兄であった。一旦繋がりがかけた飛鳥井の消息であるが、翌朝早く山伏は下山し、手がかりは途切れる。

右近も狭衣も参詣の目的は行方を求める人との再会ではなかった。「視覚」に呼びおこされた記憶、信仰による「聴覚」への興趣から、思いも掛けず行方を失った相手の情報が繋がる。右近はその場で玉鬘と直接再会できたが、狭衣と飛鳥井は幾重にも重なる偶然を経て、飛鳥井の死後、しかも「形見」の姫君が一品の宮（Ⅰ）の養女となつていてというひねった再会となる。

二、一品の宮（Ⅱ）と玉鬘

飛鳥井遺児と玉鬘の引用関係は、前節で取り上げた土岐武治氏の飛鳥井の夕顔引用をまとめた四項目にあげられた中の「遺児に対する光源氏と狭衣の世話のありさま」が、玉鬘と一品の宮（Ⅱ）に関わる。世話とは、玉鬘の裳着と遺児の姫君の袴着の儀式の準備を指し、実母と死別したのち実父との再会が叶わないまま他家の養女となり、世間が実の父娘と認定するのに通過儀礼を手がかりにする点が共通する。ただし厳密に言えば、光源氏は養父、狭衣は実父であり、また養女として世話をする玉鬘をどういう形で実父内大臣に返すかを考える光源氏と、結婚相手の一品の宮（Ⅰ）に引き取られた実の娘を取り戻そうとする狭衣、という大きな差異がある。

玉鬘は「玉鬘」巻で上京の後、光源氏の養女として世間に広められるが、早くから「父大臣にも知らせやしてまし」（胡蝶③一七四）と実父との再会を期する。しかし、光源氏の庶子と信じる内大臣からは「年ごろ音にも聞こえぬ山がつの子」（常夏③二二六）と蔑視さえされ、当代（朱

雀)の尚侍出仕の要請に応じ二三歳という遅い年齢で行う裳着の儀で腰結い役を依頼された内大臣が、ようやく真相を知ることになる。

一方、飛鳥井の遺児は、一品の宮(Ⅰ)に実父の情報が伝えられぬまま生後百日でひきとられる。玉鬘とは生母の地位の低さが共通し、『古今和歌集』の「あなこひし今も見てしか山がつかきほにさける山となでしこ」(巻十四・恋四・六九五・よみ人しらす)の比喩表現を共有する。

『源氏物語』では、雨夜の品定めの際で頭中将(のちの内大臣)が光源氏に語った、夕顔の和歌に引用される。

山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露

(帚木①八二)

二〇年を経て、光源氏も内大臣もこの歌を覚えており、語り手の発言に、父内大臣が「かの撫子を忘れたまはず」(蜩③二一八)という。光源氏は玉鬘と和歌を贈答するに際して、「山賤」の語を避けるが、玉鬘は自ら返歌に詠み込む。

なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人やたづねむ(光源氏)

山がつの垣ほに生ひしなでしこのもとの根ざしをたれかたづねん(玉鬘)

(常夏③二二三)

『狭衣物語』では飛鳥井を引き取った常盤の尼君の発言にみえる。

いとあはれに恋しうは思ひきこえながら、かかる山がつの垣ほに生ひ出でたまはんも口惜しきを、いかがはせんずるなどぞ思したりし。

(巻三②六〇)

さらに、それを受けて狭衣が一品の宮(Ⅰ)に遺児のことを言う。

ここかしこ、例の人のやうならましかば、おのづからうち出づる山賤の垣ほにもあらまし。今は、いかがはせん。

(巻三②一二四)

「山賤の撫子」は夕顔と玉鬘、飛鳥井と遺児の母子にわたる比喩表現となっていた。

三、一品の宮(Ⅱ)と明石の姫君

『物語二百番歌合』八十三番は、明石の姫君を紫の上に渡す時の明石の君(詞書では「明石の上」)の歌と、姫君を一品の宮(Ⅰ)に渡す時の飛鳥井の絵日記中の歌を番わしている。また、狭衣即位後に一品の宮に叙された遺児に届けられた「飛鳥井の絵日記」の一人称の語りは、『源氏物語』の「若菜上」、出産をひかえた明石の女御の傍らで「ほけ人」と評されながらも語り続ける明石の尼君の姿に通じる。「日記」の形をとって飛鳥井は一人称で語りかけてくるが、それは同時に、一族の行く末を祈り、将来を託す世代に一族の悲哀を伝え、現在の地位と将来がそれらの過去の出来事の上に立脚していると語りかける明石の尼君の姿に重なる。飛鳥井の死までの動静と姫君の将来への不安に挟まれて、巻三の常盤の尼君の語りでは十分に触れられなかった女兒引き渡しのおかげだが、日記では詳細に綴られる。「若菜上」の尼君の語りが概略化されたものであるのは、「松風」から「薄雲」にかけて、将来の后がねとして「袴着のことなども人知れぬさまならずしなさんとなむ思ふ」(薄雲②四二七)との光源氏の発言から、姫君を紫の上へ渡す場面が綿々と叙述されたことによる。二人の姫君は、死別、生別は異なるが、ともに実母を知らないで生育する運命を生きる。(なお、「着袴」の儀が、明石の姫君の場合は母子の別れの理由、飛鳥井の姫君の場合は実母の存在が立ち現れる、と対照的であるがここでは触れない。)

また、実母について知る時期も見方によつては共通する。飛鳥井の女兒は生後百日、明石の姫君は袴着を機に紫の上に引き取られるが、実母との別離の事情を詳しく知るのは、一品の宮(Ⅱ)は狭衣の皇女となつて入内した後、明石の姫君は東宮の初めての子の出産を控えた時である。成人する前に実父母の存在を理解し、再会を求めた玉鬘との違いは、こ

のあたりから明確になってくる。

飛鳥井の女兒が引き取られた経緯は、「世に知らぬうつくしき」と聞いた一品の宮（Ⅰ）が「いみじうゆかしがらせたまひしかば、百日の折に参らせ」（巻三②五九）、そのまま留めおいたという程度のこと、一品の宮（Ⅰ）の叔母（母の女院の姉）で堀川大臣の妻洞院の上が今姫君を「つれづれの慰めにせん」（巻一①九四）と養女にしたのと大差はない。しかし、倉田実氏は、同じような養女である今姫君に対して養母の洞院の上は「細かな配慮に乏しいとはいえ、それなりに愛情をそそいでいるのであり、今姫君はそれを感じている」と指摘されるが、一品の宮（Ⅰ）と姫君の間に愛情が確立しているとは言い難く、姫君は乳母を「母とこそは」（巻三②一二三）と呼んでいる。

明石の姫君が入内を念頭に傅かれたのとは異なり、飛鳥井の姫君は一品の宮（Ⅰ）の将来に関わって養われたのではない。生母の身分の低さゆえの姫君の将来について、先述の「山賤の垣ほ」の発言に続けて常盤の尼君が危惧している¹³。

かかる山がつの垣ほに生ひ出でたまはんも口惜しきを、いかがはせんずるなどぞ思したりし。宮にもなかなかなる知る人など出でて、知り顔に言はんなどぞ、忍びさせたまふめり。 （巻三②同六〇）

御前にこそ、うつくしきにも罪許しても思すらめ、候ふ人々は、あなづらはしうこそ思ふらめ、幼きほどこそ、さてもあらめ、物の心知り、大人びなば、あまた候ふめる中納言、宰相の君などのつらにてこそはあらめ。 （同）

美質だけでは乗り越えられない身分の壁を自覚した発言であり、また将来上臈女房になる可能性も示唆している。後に、一品の宮（Ⅰ）の狭衣避の過程でこの危惧は現実のものとなる。宮の心中ではあるが、次のような否定表現がなされる。

いとあなづらはしく思しつる人のゆかりなれど、ただうつくしかりつるによりて、さうざうしきに、をかきさまに生し出でて持たらんと、思しかしづきつるに （巻三②一二三）

ただし、袴着ののち姫の乳母たちは、「かかりとても、口惜しう飽かぬことありぬべき御行く末ならねど」（巻四②三三三）と、狭衣の実子であるので社会的な安定を得ることを認識している。

狭衣は、姫君の裳着に関しては主導権を握りながら、女院の権限を最大限に利用し、自身の下心を隠蔽する。若宮の御袴着を堀川大臣が準備するのを見て「このついでに着せばや」と思い立ち、「私のいそぎにはべらばや」と一品の宮に提案する（巻三②一二五）。さらに「院の御前に、女子は手触れさせたてまつらまほしけれ」と提案するが、女院は「御腰結に、自らの代りに」と堀川大臣に依頼する（巻三②一二八）。「養母子関係にある一品宮と飛鳥井姫君」の関係を崩さぬように、「一品宮と母女院」の母子関係を利用して、裳着を機に実母飛鳥井の存在を消去したことになる。

四、飛鳥井と一品の宮（Ⅱ）

一品の宮（Ⅰ）は姫君の裳着の後、「ただ顕して、渡しやしてましと思すを、知りたまはず、何心なき御さまのうつくしきを、さすがにあはれにも、人知れず思しける」（巻四②三三三）と、狭衣に渡すことも考えるが、結局は思いとどまる。そもそも一品の宮（Ⅰ）に引き取られた時点で、飛鳥井の存在は消されてよしとされるものであった。平井仁子氏は、「飛鳥井の身分の低さが「既に死去している点でかなり減免でき」、養母の一品の宮の地位が最上のものであること、外の二人の若君同様、狭衣ひいては堀川家の子であることが重要で「母は不要」とさえ言い切る¹⁶。

さて、狭衣が実父と了解されてからの一品の宮（Ⅰ）は仏道に励み、「すべて何事も見入れ聞き入れさせたまふ事もなく、ただ明け暮れは行ひよりの外の事な」（巻三②一三五）く過す。情報の受け取りを絶つことで、同時に自らの発言も閉ざし、飛鳥井の子である姫君についても一切他言しない態度を貫くことにもなる。後に、狭衣は遺児を一品の宮に叙した時に一品の宮（Ⅰ）が「思しあなづりし」（巻四②三八〇）と思り返すが、生母の身分から生じる将来への不安は回避される。一節の「唐泊」引用でも触れた道成の一首は、狭衣に対する返歌であるだけでなく、自分の思人であった飛鳥井は「唐泊」で行方を失ったと言明し（巻四②三九三）、狭衣帝の皇女一品の宮（Ⅱ）の生母とは無関係を装い、素性を隠蔽することに寄与したことになる。

五、狭衣の子ども達と光源氏の子ども達

飛鳥井・一品の宮（Ⅱ）母子の像は、流離というべき体験に関する夕顔・玉鬘の引用から、実母の手から離れることで栄華の階梯を登る明石の君と姫君の引用へとスライドさせながら形成されてゆく。そして『源氏物語』引用については、さらに、一品の宮（Ⅱ）以外の子ども達について言及することからも、『狭衣物語』の目指した世界が立ち現れて来る。

親子関係が世間に公表されることが憚られる存在として、嵯峨院の女二の宮との間の若宮がいる。詳細に見れば差異は多々あるが、光源氏と藤壺の間の冷泉院の出生に比される存在である。¹⁶ 世間では嵯峨院と皇太后宮（女二の宮の生母）の子と認識され、飛鳥井の遺児とは年子である。平井仁子氏は子ども達は「後継」として、「親を支える役割を負って誕生する」、つまり「狭衣のために誕生した」とまで極言される。¹⁵ しかし、狭

衣即位と光源氏の院へ階梯は異なる。子に関わって確認すれば、冷泉帝は生母藤壺の薨去を機に出生の秘密を知り、実父を差し置いて治天の君でいることへの自責の念から光源氏を「太上天皇にならずらふ御位」（藤裏葉③四五四）につける。それに対して狭衣は若宮との親子関係の秘密は保持されたまま、賀茂神の神意に拠って即位し、藤壺との間に二の皇子が誕生するに至って、若宮の即位は宙づりのまま物語は閉じる。このように帝位に関わっては父と子の関係は異なっている。

子ども三人が、実子の男子一人、秘密の皇子一人、劣り腹に生まれた女子一人の構成であることは共通する。光源氏の子については、「宿曜」に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」（濤標②二八五）の予言が実現される。しかし、光源氏の子である冷泉は実父の光源氏に「太上天皇にならずらふ御位」を贈ったものの、自身に男皇子はなく、皇統は継承されなかった。『源氏物語』の末年は今上治世であるが、将来的に帝位を継承するのは、明石の中宮所生の当代の皇子達、光源氏の外孫達である。しかし、今上は光源氏の兄朱雀院の皇子であるので、光源氏を始祖とする皇統とはならない。対する狭衣は、即位に拠って新たな皇統を立てることになる。狭衣帝の妃藤壺との間の二の宮は狭衣帝の嫡子である。また一品の宮（Ⅱ）は、狭衣の「宮達は、ただ心にくくてやみたまひなんこそ、目安かりぬべけれ」（巻四②三九一）という皇女独身論の方針に拠って東宮妃となることを拒まれ、狭衣帝の皇女としてのみ存する。しかし、一品の宮（Ⅰ）の薨去後、その兄の一条院から宮の「形見」（巻四②三七九）と見なされて後見を得る身となっていた。田村良平氏は、一品の宮（Ⅰ）が狭衣との結婚によって一条院皇統の尊厳性を消失させ矮小化させ、相対的に狭衣の帝位または皇統を尊厳する役割を果たしたとするが、その一条院の血統を一品の宮（Ⅱ）が引き受けることで、一条院の系譜の一端が狭衣の膝下

に据えられたといえる。さらに、女二の宮との間の若宮は、嵯峨院の子と認識されているのを狭衣が預かり、「兵部卿宮は、さりととも、いたづらにはなさせたまはじ」（巻四②四〇五）と最後まで嵯峨院から後を託される。

狭衣の時間は狭衣帝の治世で終わり、子どもたちは当代の子としてのみ存している。

二男一女という子どもの数、表向き帝の子となっている不義の皇子一人、正式な結婚によって生まれた後嗣の男子一人、卑賤の母から生まれた女子一人の設定まで対応するが、狭衣即位によって三人すべてが皇族となった点で、中の劣りが太政大臣で終わった光源氏の子を越える。しかも飛鳥井も藤壺も、夕顔・明石の君、葵の上よりも不遇な環境に置かれていた。式部卿の姫君として登場した藤壺が、母北の方逝去後に狭衣邸に引き取られた場面では、祖母の尼君を喪った若紫が二条院に引き取られた朝を引用し、後見を失った寄る辺のない境遇が強調される。そのような境遇にあったものが狭衣の屋敷に引き取られる変則的な結婚を経て、六条院の春の対の主とされる紫の上よりさらに上位である中宮の座を手に入れる。また、明石よりもさらに遠隔の地に下向した飛鳥井所生の女子が一品の宮になる。つまり光源氏の子ども達よりもさらに下位の母から生まれた子ども達が、狭衣の子であることによって母の劣性が消去され、皇族となる場所に狭衣の超越性を支えるものを見る。

森一郎氏は『狭衣物語』の「模倣」ではなく、方法としての「変形」^{ヴァリエーション}を認めて作品の独自性を読むことを説かれたが、『源氏物語』の光源氏を超越する狭衣の造型に、『源氏物語』の本文を引用し身分の高低差を増幅することで、「方法的」に『源氏物語』を越えようとした。

狭衣は藤壺中宮の産んだ二の皇子に自らの皇統の後嗣を得ただけでなく、女宮の一品宮（Ⅱ）の存在も視野に入れると、子という形で父堀川

の大臣の兄弟である一条院と嵯峨院の二つの皇統、自身に先行した古き皇統を膝下に置いたことになる。賀茂の神意による即位もさることながら、光源氏の皇統が冷泉院をもって継承されずに兄朱雀院の皇統に回収され、いわば正当な血脈に戻ったのとはまったく異なる『狭衣物語』の皇統継承のあり方の一端を見ることができると言える。

注

- ① 『狭衣物語の研究』（風間書房、一九八二）。
- ② 『王朝物語史論 引用の『源氏物語』（笠間書院、二〇〇八）。
- ③ 注①に同じ。「虫明」にある「等覚寺」の観世音菩薩の功德によって、兄の山伏に救われ、京に戻ることを得た。
- ④ 『狭衣物語の地名表現』（『講座平安文学論究 第十三輯』風間書房、一九九八）。
- ⑤ 「和歌に見る『狭衣物語』享受の一例——「虫明の瀬戸」と「唐泊」（日本女子大学『瞿麦』一七号、二〇〇四・六）。
- ⑥ 『狭衣物語』における〈ことば〉としての地名——「唐泊」を中心にして」（狭衣物語研究会・編『狭衣物語が拓く言語文化の世界』翰林書房、二〇〇八）。
- ⑦ 注④に同じ。
- ⑧ 注④に同じ。小町谷論文のほか、後藤康文「もうひとり薫」（『狭衣物語論考 本文・和歌・物語史』笠間書院、二〇一一）、桜井宏徳「『狭衣物語』における〈ことば〉としての地名——「唐泊」を中心にして」（狭衣物語研究会・編『狭衣物語が拓く言語文化の世界』翰林書房、二〇〇八）など参照のこと。
- ⑨ 土岐武治氏は「若紫」北山での僧都の声の引用とされる（前掲注①）。
- ⑩ 注①に同じ。
- ⑪ 拙稿「飛鳥井の絵日記」（『源氏物語』宇治十帖の継承と展開』和泉書院、二〇一一）。
- ⑫ 「今姫君の養女性」（『王朝撰関期の養女たち』翰林書房、二〇〇四）。なお岡田広氏に「『狭衣物語論』——今姫君と飛鳥井姫君の物語を中心に

―(國學院大學國文學會『日本文学論究』六四、二〇〇五・三)があり、洞院の上の養女今姫君と飛鳥井遺児の系譜に「奇妙なほどの類似性」を認め、「中の品の母親を持つ共通点」から、養女教育の重要性を知った狭衣が自らの手で姫君を教育するに至ったとする。

⑬ 倉田実氏「飛鳥井の姫君の位置づけ」(注⑫に同じ)。氏は乳母の数から「女王の待遇に相応しい」とされる。

⑭ 拙稿「『狭衣物語』の女院」(『源氏物語』宇治十帖の継承と展開』笠間書院、二〇一一)。女院は今姫君、あるいは飛鳥井の遺児といった自らの女房クラスの女性を母とした姫君たちに「女院」という女の最高位の権威付けを保証する役割を担わされる。

⑮ 井上眞弓氏「女君の母子関係」(『狭衣物語の語りと引用』笠間書院、二〇〇五)。飛鳥井と女児をめぐる四様の母子関係を整理しておられるうち、二項目と四項目。

⑯ 「狭衣物語試論 ―子の意味を問う―」(平安文学論究会・編『講座平安文学論究 第十六輯』、風間書房、二〇〇二)。

⑰ 注④に同じ。

⑱ 注②に同じ。

⑲ 注⑮に同じ。

⑳ 『狭衣物語』における飛鳥井母子の位相」(早稲田大学大学院中古文学研究会『中古文学論攷』第八号、一九八七)。

㉑ 注①に同じ。

㉒ 「狭衣物語の方法 ―狭衣物語・覚え書き―」(『源氏物語の方法』(桜楓社、一九六九)

㉓ 皇位継承の具体的なシミュレーションは倉田実氏「使衣物語の皇位継承」(高橋亨編『源氏物語と帝』森話社、二〇〇四)に詳しい。

(大阪府立春日丘高等学校教諭)

本文は『源氏物語』『使衣物語』は小学館の新編日本古典文学全集、『古今和歌集』は、角川書店『国家大観巻一』、『物語二百番歌合』は岩波文庫『王朝物語秀歌選(上)』に、それぞれ拠った。

(付記) 中古文学会関西西部会第三十一回例会(二〇一二年六月九日)の発表を改稿したものである。当日懇親会でご指導を賜りました諸先生方、特に森一郎先生に御礼を申し上げます。